NIE特集

Newspaper In Education

毎月第2・4火曜日発行

どきどき小学生

生出小

学校名　仙台市立生出小学校　　校長　細倉　公一
所在地　仙台市太白区茂庭中ノ瀬西５の２　　児童　75人
電話　022（281）2033

うきうきキャンバス

あさがおとこびと
1年・南部心路

つのが動くカブトムシ
2年・太田遥大

とうめい人間のメイちゃん
3年・広田俊輔

七夕かざり　4年・伊藤風花

ふわふわクッション
5年・吉野春佳

ガソリンスタンドとその周辺
6年・山田健太

教育と養蚕業で発展

石碑の謎と生出村の歴史に迫る！

知り隊

生出小の正門前に大きな石碑があります。漢字がほとんどの石碑なので、いったい何が書いてあるのか以前から不思議に思っていました。石碑の上部には「至誠一貫」と大きく書いてあり、その下に人の顔がほられています。私たちは、その人が誰なのか、そして、どうしてこの石碑が生出小の前にあるのかを調べることにしました。

資料を見たり、先生に教えてもらったりしました。そして、今も残るこの石碑の人物は、生出小の初代校長「茂庭秀福」先生と分かりました。明治時代に校長先生となって、生出村（当時）の子どもたちの教育のために一生懸命努力された人でした。

生出小ができたのは明治6（1873）年で、そのころの生出村は山や林が多い所でした。石碑には、「茂庭校長先生は、貧しくて小学校に通えない子どもたちを助けて学校に通えるようにしたことや、教育の大切さをみんなにわかってもらえるように、40年間努力しました」というふうに書かれていました。その生き方を「至誠一貫」という言葉で表したのです。昭和11（1936）年に、村の人々が「茂庭校長先生のすばらしさを後世の人々に伝えよう」と、この石碑を建てました。

明治のころの生出村は、とても貧しい村でした。そのころの村長さんは、長尾四郎右衛門と言い、生出村を「日本三大模範村」に育てたすばらしい方でした。村長さんは養蚕業に力を入れ、荒れ地や山林を開いて桑畑をつくりました。そして、生糸は外国にも輸出されていました。養蚕は、村人の暮らしを大いに助けました。村の礎（いしずえ）を築いた名村長でした。

現在の生出地区は、水田と畑が広がっています。毎年冬になると、田んぼでたこ揚げ大会をします。「フライハイおいで」と呼ぶ有名な大会となり、今年（3月）は各地から20団体の300人が参加しました。

生出地区は仙台市の南西部にあり、道路も良くなって町として発展を続けています。

◇　◇

今までは、この石碑の周りで何げなく遊んでいましたが、いろいろ調べていくうちに生出小や生出地区の歴史、昔の様子がわかりました。長尾四郎右衛門村長さんと茂庭秀福校長先生のおかげで今の生出小や町の発展があるのだと、あらためて気づかされました。

文・細川玲央、村井龍晨、吉野春佳（5年）

この方が、初代校長の「茂庭秀福」先生です

初代校長らが礎築く

教え隊　赤石分校

赤石分校で～す。がんばっていま～す

仲良しの４人が通学

生出小には、赤石分校という小さな学校があり、赤石地区の１年生から４年生までが通います。本年度は２年生と４年生が２人ずつ勉強しています。とても仲良しです。

学校の近くには、アユやウナギがたくさんすむ名取川が流れ、校庭にはときどきカモシカやタヌキなどがやって来ます。秋の紅葉もとてもきれいです。

南赤石地区には、十一面観世音という金色の仏像があります。４月のお祭りの日だけ、その姿を見ることができます。

文・阿部真奈、早坂真弥（５年）

言い隊

■ 豊かな自然を大切に ■

通学途中にある花だんに、ふと目をとめると、昨日まできれいに咲いていた花の半分くらいが踏まれていました。誰かが時間をかけて育てた花だったのに、だいなしになってしまいました。踏んだ人は自然を無視しているのではないかと思いました。

ぼくたちの学校の周りには、太白山や名取川などの自然がたくさんあります。3、4年生の遠足では、必ず太白山に登り、自然の豊かさや大切さを学びます。名取川の水質を調べた学年もあります。

長い時間をかけてつくられた自然をみんなで大切にして、地球環境をよくすることがぼくたちの役目だと思います。

（5年・佐藤源）

■ 困った通学路のごみ ■

私たちの通学路には、ごみがたくさん落ちています。空き缶、お菓子の袋、ペットボトルなどいろいろあります。

ある日、犬の散歩をしている人が、「犬がごみを食べて困っているのよ」と言っていました。それを聞いて私は、犬がごみを食べて病気にならないか心配になりました。

どうして、ごみを捨てる人がいるのでしょうか？　わたしたちの地区では、夏休みのとき、ラジオ体操の後にそうじをしたので、公園はとてもきれいになりました。でも、そうじをしなくてもいいように、本当はごみを捨てないでほしいです。

（5年・村田羽瑠）

編集後記

この新聞づくりを通して、歴史ではぼくたちが知らないことがまだまだたくさんあることがわかりました。特に、長尾四郎右衛門村長さんの仕事が今の生出地区の基礎となっていることを初めて知りました。休みの日に、みんなで集まって話し合ったりしながら、やっとの思いで完成させることができました。

この新聞は、多くの方の手によって作られ、多くの方の思いが詰まって、多くの方の手によって届けられているということをこの作品を通じて、改めて感じることができました。

特別審査員　片岡安祐美（宮城ゴールデンゴールズ）

「どきどき小学生」を完成させるために、みんなでたくさんの本を読んだり、インターネットで調べたりしました。休みの日に、みんなで集まって話し合ったりしながら、やっとの思いで完成させることができました。

△編集委員△細川玲央、佐藤侑奈、阿部真奈、村田羽瑠、太田温大、村井龍晨、佐藤源、吉野春佳、吉野清佳、早坂真弥（5年）

題字デザイン　遠藤凛

△指導教諭△小笠原理恵、佐々木宏

次回（12月８日）は館小（仙台市）と佐沼小（登米市）です。

応募総数4,350通！ たくさんのご応募ありがとうございました。【第16回】新聞配達に関する「エッセーコンテスト」結果発表！

最優秀賞【大学生・社会人部門】「修学旅行の日の新聞配達」

岩橋　洋明（68歳）　大分県大分市

小学六年生の秋。夕刊配達を終えて家に帰ると学校の先生二人が母と話をしていた。顔を見るなり母は「お前、修学旅行には行かないと言ったのかい」と聞いた。「うん。新聞配りがあるから行けん」と答えたが、内心ではお金の負担もかけたくないという気持ちだった。「新聞は私が配るから大丈夫。修学旅行には参加しなさい」と母が言うと、先生たちも「私も手伝うから心配しないでいい」と優しく声をかけてくれて、帰り際に耳元で「これ小遣いだよ」とささやいて百円札五枚入った封筒を渡された。修学旅行まであと三日。

翌朝から母と先生二人に配達先を一軒ずつ教えながら、もし一部でも余ったら後戻りして確認してくださいなどと話した。そして修学旅行当日の朝六時、三人の優しい笑顔に見送られて駅まで走った時のうれしさは今も鮮明に記憶している。

その後も新聞配達は中学卒業まで続けた。

あれから五十数年。責任感と感動を学んだお陰で四十年間の勤めも終える事ができた。

最優秀賞【中学生・高校生部門】「見守られているということ」

久田　恭介（13歳）　北海道帯広市

僕が小学四年生のときの話です。両親は共働きで、僕はいわゆる「鍵っこ」でした。

ある冬の日、鍵を持って行くのを忘れて家に入れずにいました。その日はとても寒く、雪と風を防ごうと大きいスノーダンプに隠れるようにしゃがんでいました。そんな僕に新聞配達のおばさんが「どうしたの？家に入れないなら、この辺を配達している間だけでもおばさんの車の中であったまっていかないかい？」と言ってくれました。迷惑をかけてしまうと思い、「大丈夫です」と断りました。

十分程たったころ、おばさんの車が家の前に止まりました。降りてきたおばさんの手には、毛布・ココア・肉まんがありました。「これであったまりな」と手渡してくれました。本当にうれしくて、温かさにほっとしました。

あとで母から聞いたのですが、おばさんは僕が生まれた時からずっと新聞を届けてくれていて、「歩くようになったんだね」「もう小学校かい？」「バスケ始めたんだね」とその時々に僕の成長を見守ってくれていたことを知りました。

恥ずかしくて、あいさつも出来ずにいましたが、冬の出来事があってからあいさつするようになりました。気づかなくても、みんなに見守られていることを感じた出来事でした。その時のココアの優しい温かさを忘れません。

最優秀賞【小学生部門】『かっこいいお父さん』

平田　極（9歳）　沖縄県石垣市

僕のお父さんは高校卒業まで新聞配達をしていたので、今でも朝五時前に起きる。そして僕たちに届きたての新聞を読んでくれます。僕はこの新聞読み聞かせが大好きです。また、よく新聞配達の大変さも伝えてくれます。配達をする人はどんなに病気をしても休めないし、犬や酔っぱらいの恐怖にも負けられない。雨の日は新聞をぬらさないために自分がぬれていること。どれもこれも全部、配る時間を守るためだけに新聞配達の人が当たり前にしている。だから配達の人はすごくて偉いんだよって。

そんな努力を知ると、一枚の新聞がとても重く感じられます。何でも続けること、守ることはむずかしいので、毎朝感謝と尊敬の気持ちで大事に読みます。

農業で僕たち子供五人を育てるかっこいいお父さん、新聞配達をしたからすごいお父さんになったのか、すごいお父さんだから新聞配達ができたのかわからないけど、僕もお父さんみたいに仕事と家族を大切にする男になりたいので、いつか、偉大な新聞配達をしたいと思います。

審査員特別賞

「息子の成長を助けてくれた新聞配達」吉弘　香苗（58歳）さいたま市桜区

「人のぬくもり」岩間　優（14歳）東京都文京区

「ぼくのともだち」伊藤　海利（9歳）岩手県八幡平市

その他の入選者の方々

[大学生・社会人部門]〈優秀賞〉森田昌宏（千葉県我孫子市）〈入選〉渡辺泉（兵庫県高砂市）、佐々木茂良（神奈川県秦野市）、児玉公子（名古屋市中村区）、高杉誠一（北海道苫前郡初山別村）、長岡恵子（岐阜県各務原市）、斉藤潤子（大阪府吹田市）、佐藤洋子（新潟県上越市）

[中学生・高校生部門]〈優秀賞〉北川弥生（福井県福井市）〈入選〉中川蓁（佐賀県鳥栖市）、湯浅仁美（徳島県阿南市）、黒木朋臣（北九州市小倉北区）、鍔谷研（福島県福島市）、畠山湧夢（仙台市太白区）、染宮千明（福島県福島市）、齋藤翔（青森県青森市）

[小学生部門]〈優秀賞〉熊谷萌（愛知県西尾市）〈入選〉安藤瑞希（東京都練馬区）、亀尾優希（北海道苫小牧市）、山田帆南（長崎県西海市）、村田悦真（滋賀県大津市）、高木沙羅（東京都小平市）、森田崚文（和歌山県橋本市）、白井萌絵（熊本県熊本市）（敬称略）

社団法人 日本新聞協会
〒100-8543 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル
“社会を読もう” http://www.readme-press.com
全入選作品は上記ホームページからもご覧いただけます